



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『実学報』東文報訳から見た中日語彙交渉の研究〔全文の要約〕
Author(s)	陳, 静静
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13405号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74483
Type	doctoral thesis
File Information	Jingjing_Chen_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：陳 静静

学位論文題名

『実学報』東文報訳から見た中日語彙交渉の研究

清朝末期の中国では、西洋の近代文明を取り入れるために、日本からのルートが近道だと認識されていた。様々な方法を通して日本から近代文明を取り入れようとしたが、その中で日本の新聞記事を翻訳することが最も早い方法であった。しかし、当時の中国では日本語翻訳者は極めて不足していた。清国留学生が活躍する前に、日本人漢学者が一時期その代役をしていた。日本人翻訳者の協力を欠くなか、中国人の手による翻訳初期のものとして『実学報』は貴重な資料となる。

本論文は、1897 年に上海で刊行された『実学報』を対象として、その「東報輯訳」「東報訳補」欄のソース記事、日本漢字語の受容状況、翻訳の際に参照した書物、『時務報』との関係など翻訳事情を分析し、清末の中国人による翻訳の初期における中日語彙交渉の実態を実証的に考察したものである。

日清戦争後、中国では維新変法を紹介する新聞が多数発行された。1895 年から 1898 年までに、中国で創刊した新聞社は 27 社に達した。それらの新聞には、日本の新聞記事の中国語訳を掲載したのがあり、中でも比較的正確に出典記録を残しているのは『時務報』と『実学報』である。本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」欄が最初とされている。当時の中国では、本格的な日本語教育がまだ始まっておらず、日本人漢学者の古城貞吉が『時務報』の翻訳を勤めた。一方、『時務報』の翌年に刊行された『実学報』は、日本語翻訳者の協力を欠くなか、中国人翻訳者 4 人によって 139 本の訳文を中国社会に提供した。当初二人による「口訳筆述」の形を取っていたが、次第に一人の手によって翻訳されるようになった。翻訳者の担当範囲は「東報輯訳」欄：「第 2 - 3 冊王宗海口訳王仁俊筆述」「第 4 - 5 冊王宗海口訳孫福保筆述」「第 6 冊 - 第 11 冊孫福保訳」、「東報訳補」欄：「第 9 冊 - 第 14 冊程起鵬訳」である。

貴重な言語資料ではあるが、『実学報』への研究は不十分であった。『実学報』に関する研究は主に中日同形語の観点で行われ、その成果によると、『実学報』の訳文では日本漢字語 812 語が使用され、特に中国で「科学」という言葉を最初に使用したのは『実学報』「東報訳補」欄であることが分かったが、翻訳者の日本漢字語への受容度に関しては触れていなかった。また、日本漢字語以外の翻訳や、翻訳の際に参照した書物、『時務報』の訳語との関係などにも触れていなかった。

本論文は、序論で挙げた課題をめぐって、中日同形語の視点からの研究を補って、翻訳の視点から『実学報』の日本漢字語を再検討し、また、視野を広げて日本語の外来語の翻訳から『実学報』の翻訳事情を考察した。論文は序章・終章、7 章の本論からなる。以下、論文の構成に従い、各章の内容の要約を記す。

第 1 章では、先行研究とその問題点を指摘し、本論文の研究課題を示した。近代中日語彙交渉に関する先行研究は個人の著作に関する研究、辞書・教科書に関する研究、専門用語の研究、新聞・雑誌の研究など、中日同形語の面から盛んに行われていることを述べ、そして、『実学報』に関する研究を主としてその問題点を次のように指摘した。①10 種類のソース記事の掲載紙に検討の余地がある。②138 本のソース記事の内訳が異なる。③中日同形語の観点の考察に限界がある。④語種別での考察が不十分である。⑤『時務報』との関係の考察が不十分である。

第 2 章では、ソース記事の再調査によって、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事 138 本を明らかにした。『実学報』の出典記録によると、中国語に翻訳された日本の新聞・雑誌は 16 種である。秦（2007）では、『大阪朝日新報』『中外商業報』が『大阪朝日新聞』『中外商業新報』の誤記と指摘し、14 種に確定した。さらに、秦（2010a、2010b）では、『経済雑誌』『東京電報』『東京日日新報』『日本報』出典と記された記事の出典を指摘し、例えば、出典記録が「東京電報」と「日本報據紐約里拉羅道報」と記載された記事は『神戸又新日報』の掲載記事であり、原文記事の掲載紙を 10 種に確定した。なお、『銀行半季報』は実在しなかった新聞とし、出典が記載されなかった記事「下議院議長更迭」の出典は分からないままだった。本研究の再調査により、実在しなかった『銀行半季報』が「日本銀行半期報告」であることを明らかにし、「下議院議長更迭」のソース記事が『東京日日新聞』（1897 年 8 月 31 日発行）に出典を求められることを明確にした。ほかに、出典記録の間違いを訂正したうえで、『実学報』を通して中国に導入された日本の新聞を 9 種に確定した。

第3章では、同一ソース記事に基いた2本の訳文を取り上げ、翻訳者の間の用語傾向を考察した。138本のうち、前期と後期に2人の翻訳者によって翻訳されたのは『中外商業新報』明治30年9月14日掲載の「廣東金礦の發見」のみであった。それに基づいた孫福保・程起鵬両氏の訳文2本を日本語原文と照合し、文字・語彙・文単位での考察によって、字面では程訳が原文に近いが、原文の意味を伝える面においては孫訳が優れていることが分かり、程氏が新語を積極的に使用したのに対して、孫氏が比較的慎重な態度を示している結果を得た。そのような積極的な使用のおかげで、日本漢字語が大量に中国に取り込まれたかと推測した。

第4章では、まず『実学報』における日本漢字語の位置付けを提示した。そして、注釈付きの語と注釈なし語に分けて翻訳者の日本漢字語への認識を検討した。注釈付き語に関して、孫福保氏を主として、訳文に多くの注釈を残してきた。それらの注釈内容を分析した結果、翻訳者が漢文教養を活かして説明しようとした姿勢が見られるが、「巡查」「方針」のように日本漢字語の意味に理解されなかったことのほか、「諏訪」のように漢字表記語を日本漢字語と誤解されたことも分かった。一方で、注釈を付さない語に関して、日本漢字語「時間」を例に考察した。近代の重要な概念としての「時間」が原文に現れず、日本独自の意味の時をかぞえる単位の「時間」に対して、その時代に一番相応しい訳語“點鐘”が施されたほか、同形語“時間”が『実学報』の翻訳より中国社会に紹介され、短期間中国社会に受け容れられたと推定した。

第5章では、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事に掲載されている外来語の翻訳状況を分析した。外来語（延べ505語、異なり297語）をA類「漢字あり片仮名語」（延べ159語、異なり71語）とB類「片仮名单一表記語」（延べ346語、異なり226語）に分け、漢字表記があるA類の場合、その漢字表記を継承しやすい（例えば、「^{カナダ}加奈陀」「^{ハワイ}布哇」「^{ガラス}硝子」「^{コーヒー}珈琲」など）が、漢字表記がないB類の場合、音訳、意訳されたり工夫したなか、翻訳作業が進むにつれて音訳語に当てられた漢字に一定の規則性が見えた（例えば、「ア：矮」「オ：啞」の対応）。また、同紙に掲載された「中西合璧表」と比較した結果、「カナダ」「シカゴ」の訳語として、東報訳語が「加奈陀/加拿陀」「雪茄閣」で、英報訳語が「加拿大」「雪加哥」であるように、翻訳者は英報訳語を参照しなかったことが分かった。

第6章では、『実学報』音訳語における片仮名と漢字の対応関係を利用して、音訳語の作成に参照した書物を考察した。中国人の日本語に関する記録は明の時代に盛んに

行われたが、それから冷めて、清朝末期までには深く研究されていなかった。19 世紀 70 年代、中国政府から派遣された視察団の記録や日本に滞在したことのある中国人の著作に日本語に関する研究が多く現れた。そのうち、父親の陳明遠について 6 年間日本に滞在した陳天麒の著作『東語入門』(1895) でまとめた片仮名と漢字の対応が『実学報』のそれと高い類似性を持っていることから、『東語入門』の発音の説明部分と本文内容と照合した結果、『実学報』音訳語を作成する際、「いろは歌」をはじめ、『東語入門』から強い影響を受けたことが分かった。さらに、『東語入門』と異なる片仮名と漢字の対応を他の日本語研究資料と比較した結果、『実学報』の前期と後期に黄慶頤の『策鰲雜摭』(1889)「音注日本字母正草二体」を参照した音訳語が十数語見つかった。そこで、『実学報』の翻訳時、上記二書を参照したことが明らかになった。

第 7 章では、日本人漢学者が翻訳したものが初期中国人翻訳者に参照されたことを想定しながら、『実学報』の音訳語を『時務報』と比較対照し、『実学報』と『時務報』の関係を検討した。まず、両紙における共通外来語 21 組の翻訳状況を比較し、両紙に同じ音訳語が見つからないが、同じ音訳方法を使用する傾向が見られた。そして、音訳語全般へと範囲を広げ、両紙における片仮名と漢字の対応をまとめ、音訳漢字の使用や、片仮名と漢字の字数対応などから考察した結果、両紙音訳語にはそれぞれの母語干渉があるにも関わらず、ともに中国語方言訛りの音訳字が見られる。そして、『時務報』は中国既存語を尊重しつつ、同紙中国人による英報訳語を参照したのに対して、『実学報』は同紙の英報訳語を参照せず、『東語入門』などを参照して機械的に音訳語を施した特徴が見られた。それらをもって、両紙には音訳語の面では参照関係がないと推定した。

以上のことから、本論文は、清末日本へ留学した中国人が活躍する前の段階に、積極的に日本の新聞記事を翻訳し、中国社会に紹介する『実学報』の翻訳事情をめぐって、中日語彙交渉の実態を実証的に明らかにした。本研究を通して、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事をすべて確定し、従来の中日同形語の視点の研究を補って、翻訳の視点から日本漢字語を検討すべきことを提案した。また、音訳語における片仮名と漢字の対応から参照した書物を確定した。今後の研究に新しい分析方法を導き出す意味で重要な意義があると考えられる。